

コンプライアンス経営を最重視 業界の社会的地位向上への貢献を目指す

千葉県千葉市稲毛区に本社を構える前田運輸倉庫(株) (前田貴昭代表取締役) は、農業資材や米穀の輸送、倉庫業などで歴史を積み重ね、3年後には創立 60 周年を迎える。

前田社長は、「トラック運送業界の社会的地位を下げるようなことは決してしてはならない」と、コンプライアンス重視の経営を徹底するとともに、福利厚生制度を強化するなど働きやすい職場への取り組みも加速。また、今年5月には、千葉県トラック協会の新青年部会長に就任。「青年部会の魅力を積極的に発信し続け、トラック運送業界の地位向上に取り組んでいきたい」と抱負を述べた。



濃緑色に彩られた同社のウイング車の前でガッツポーズをとる前田社長

■「自社のために働くドライバーを大切にしたい」 働きやすい職場環境整備にも注力

前田運輸倉庫(株)は、運輸業と倉庫業のほか、茨城県小美玉市でガソリンスタンドを経営している。運輸業では、千葉県内や茨城県内をはじめ関東一円で、農業などの化学品や米穀、農業資材、一般貨物を輸送しており、千葉市稲毛区にある本社営業所のほか、香取営業所(香取市)、茨城営業所(茨城県小美玉市)を構えている。

同社ではかつて、長距離輸送や深夜時間帯の輸送を行っていた。しかし、ドライバーの拘束時間が長くなってしまったため、同社では以前から長距離輸送や深夜時間帯の輸送からの撤退を進めるとともに、荷主企業の協力を得ながらドライバーの長時間労働削減を進めてきた。現在、同社のドライバーの多くは朝6時半から7時頃に勤務を開始し、夕方5時には勤務を終える。ドライバーの時間外労働時間は1か月あたり30時間~35時間程度に収まっているという。

また、同社では日曜・祝日と隔週土曜を休日としているほか、お盆休みや年末年始もしっかり休めるようにしている。仕事だけではなくプライベートも充実させることができるため、ドライバーの定着率は高い。

「当社では、仕事と生活の調和(ワーク・ライフ・バランス)のとれた働き方が可能です。一方で、荷役作業では手積み・手卸しが多いですが、拘束時間が同業他社に比べて短いこともあり、身体的な負担は大きくないと思います。当社では70歳のドライバーが在籍し、千葉県内の配送に従事しています。当社では、高齢になっても体力的に無理のない形で活躍できる環境が整っています。一方、最も若いドライバーは25歳ですが、彼は一度当社を離れて同業他社に移籍したものの、『自分の時間が確保できてプライベートを充実させることのできる働き方が、自分には合っている』と考え、当社に再就職しています。長時間労働を改善し、ドライバー

にとって働きやすい職場環境を整備していき、従業員の定着率を高めていくことで、自社の経営を持続可能なものにしていくことができるのです」(前田社長)

また、同社では退職金制度や企業年金制度の導入など、福利厚生施策の強化にも取り組んでおり、「自社のために働いてくれるドライバーを大切にしたい」という企業姿勢がうかがえる。さらに、中型運転免許やフォークリフト免許、運行管理者資格など、様々な資格の取得に際しては会社が費用を負担し、ドライバーのスキルアップを後押ししている。

さて、同社では事故防止に向けた取り組みも強化している。平成16年には全車にデジタルタコグラフを搭載したほか、24年にはドライブレコーダーも搭載している。1~2か月に1回の頻度で開催している安全会議では、ドラレコに収録されたヒヤリハット映像を見てもらい注意喚起を図っているほか、ドライバーから日々の作業における改善提案を集め、事故防止に繋げている。

同社では農家への農業資材配送も行っているが、配送先である農家周辺の道路の多くが狭隘であることから、配送にあたるドライバーには、幹線道路での走行とは違う形での細心の注意が求められる。そのため、同社では配送ルートにおける注意点などをリスト化し、ドライバー間で共有するといった対応も行っている。

事故防止に向けた様々な取り組みが功を奏し、同社ではこれまで大きな事故は発生していないという。

また、同社ではかなり早くから、デジタルトランスフォーメーション(DX)への取り組みも進めている。1980年代から自社開



前田 貴昭
代表取締役



同社では千葉県、茨城県など関東一円で化学品や米穀、農業資材の輸送を手がけている



同社では仕事だけではなくプライベートも充実させることができるため、ドライバーの定着率が高い



同社では 1980 年代から、自社開発による物流システムの導入を進めている

発による物流システム導入を進め、90年には手書き伝票やFAXを用いていた受注業務を電送データ化した。これにより、手間や時間がかかる収支の集計作業が迅速にできるようになったほか、トラック1台あたりの収益を可視化して分析できるようになった。

「当社では、先代社長が数千万円規模の投資を行い、積極的にシステム化を進めてきました。当時としては画期的なシステムだったため、多くの物流・倉庫関係者が当社に見学に訪れました。現在、物流のあり方を大きく変革させる物流DXへの取り組みが進みつつありますが、80年代からシステム化を進めてきた当社は、物流DXの先駆者であると言えるでしょう」(同)

さて、同社の歴史は、前田社長の祖父が前身の会社である(有)前田運送店を昭和32年7月に設立したことに端を発する。42年に同社を設立し、平成13年に(有)前田運送店を吸収合併。翌年には前田社長の父親である先代社長が就任している。

後に3代目社長となる貴昭氏は、長年先代社長から「うちの会社を継ぐ必要はない」と言われ続けてきたことあって、大学卒業後は法曹界を目指していた。しかし、貴昭氏は大学生の時に、先代社長から「当社を継いでほしい」と告げられた。実はその当時、先代社長はがんに冒されており、余命が長くないことが分かっていた。会社と従業員を守るために、先代社長は親戚への社長就任の打診や、第三者への事業売却に向けた準備を進めようとした。しかし、暗礁に乗り上げてしまったため、最終的に息子である貴昭氏に事業を継承させることを決めたのである。

先代社長は54歳という若さで亡くなり、14年、貴昭氏が25歳という若さで3代目社長に就任した。

「経営者としての父の背中を見ることができないまま、私は社長に就任することになりました。過去の教訓を先代社長から引き継ぐことができなかった一方、過去のしがらみを断ち切って、若い

視点で会社の改善に取り組むことができたという利点もありました。ただ、周りの従業員や取引先である荷主の多くが年長者だったことで、大変な思いもしました。特に、年上である荷主企業の担当者に気後れしてしまい、業務改善を強く求めることができなかったことが、社長就任当初の大きな反省点です」(同)

前田社長は、社長就任の翌年に千葉県トラック協会の青年部会に参加。多くの部会員との交流を通じて、大きく成長することができたという。今年5月25日に開かれた青年部会総会で、前田社長は前部会長である南雲誠氏(ナグモ産業(株))に代わり、新青年部会長に就任した。

「現在の当社があるのも、青年部会で研鑽を積み重ねてきたことが大きいと感じています。『物流の2024年問題』など業界を取り巻く諸問題がある中において、青年部会の活動を通じて部会員の社業に役立つ様々な事業・研修を行っていきたく考えています。青年部会の魅力をより多くの方々に発信していくために、部会長として全力で頑張りたいと思います」(同)

今後に向けては、業界内の過当競争が続いている中においても、コンプライアンスを重視した経営を続け、運送会社としての社会的責務を果たしていきたいと、前田社長は考えている。

「当社の経営を持続可能なものとしていくためには、荷主企業から適正運賃を収受し、それを原資として安全管理の充実化を図り、顧客に対してよりよい輸送サービスを提供していくことが必要です。さらに、当社で頑張るドライバーの生活を守るためには、福利厚生の充実も求められます。まずは荷主との交渉を積極的に進め、適正な利益を確保した上で、安全・安心な運送業界にしていけるための取り組みを加速させていかなければなりません。当社としては社業を通じて、引き続き運送業界のイメージ向上に貢献していきたいと考えています」(同)

ホットにゆーす

■自分の力を試すことができる 「オンラインゲーム」の魅力にはまる

インドア派である前田社長は、幼い頃からテレビゲームで遊ぶことが好きだったという。初期のゲームではコンピュータとの対戦に飽きてしまうことも多かったが、近年オンラインゲームが急速に広がり、他のプレイヤーといつでも対戦できるようになったことで、前田社長はオンラインゲームの虜になったと話す。

「対戦アクションで人気の『スプラトゥーン』や『マリオカート』が好きなゲームです。オンラインゲームは手軽に楽しむことができ、脳の活性化にも繋がります。また、ゲームを通じて自分の力を試すことができることも、大きな魅力です」(同)



前田社長の趣味は、「スプラトゥーン」などオンラインゲームで楽しむことだ

企業プロフィール 前田運輸倉庫株式会社

代表取締役 前田 貴昭
本社 千葉県千葉市稲毛区六方町 88-2
従業員 60人(うちドライバー 33人)
台数 49台